広告

企画・制作／LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

火をつけ、あかりを楽しみたくなる。ろうそく本来の魅力へ誘う。

大西 巧（さとし） 滋賀県／和ろうそく職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

1月18日、プレゼンテーションにて

エリア・コンサルティングでサポートメンバーの下川氏と

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

火が灯って創出される面白さ

手のひらに載る小さな和ろうそくだが、インパクトは抜群。付けられた絵は、受験生に「本気出して頑張れ!」とか、上司から部下へ「尻に火がついてるぞ」と激励したり、カップルに燃えさかる愛を届けたり。あるいはオリンピックの開催を祝い、怪獣や妖怪の好きな子どもと親が一緒に眺めることもできる。火を灯（とも）して楽しみ、その火から語らいが生まれる。灯した光景をSNSなどで発信すれば、見た人がまた関心を持って話題にする。さまざまな物語が、小さなあかりから大きく広がってゆく。

プロダクトに込めた思いを語る

和ろうそくといえば重厚な印象を受けるが、「そんな重さをかなり緩和したプロダクトが完成したと思います。くすっと笑える『火を灯す楽しさ』を創り出すことができたと思っています」。プレ・プレゼンテーションで試作品を見せたとき、ろうそくに装飾するヒントをくれた下川氏とも「ちょっとふざけすぎているかも」と心配していたが、小山氏やレクサスの関係者は面白がってくれた。大西さんは「面白い」と感じることを目指していたので、非常に励みになったそうだ。

商談する大西さん

今まで言葉では伝わりにくかった「火をつけて使ってほしい」という願いが、本プロジェクトを通じて伝わりにくさを飛び越えていってくれたと、大西さんはいう。

環境にやさしく美しいあかり

大西さんは和ろうろく舗の4代目として、主に神社仏閣や仏壇で用いられる製品を手がけてきた。2011年には、米ぬか由来のろうで作る「お米のろうそく」がグッドデザイン賞に輝いた。当時はさまざまな製品の原料への意識が高まりつつあった時代だ。化石燃料から作る洋ろうそくは、いずれ原料が枯渇する。ハゼや米ぬかなどから作る和ろうそくは、原料を国内で産出し続けられ、発生する煙やすすは仏壇の金箔を傷めにくい。きれいに使えて環境にもやさしい和ろうそくを、もっと身近に使ってもらいたいと大西さんは願ってきた。

和ろうそくの良さを知ってもらうため、美しい彩色や模様を施してみたが、これらはもったいなくて使えないという声も聞いた。「火を灯す機会を増やさなければ、ろうそくは生きません。火に対する畏敬の念や火の美しさ、おだやかな灯り、そういった本来の持ち味が発揮されなければ。そこで、どうすれば火を灯してもらえるのかをずっと考えてきました」と、大西さん。

イメージの製品化に苦心

花などをモチーフにするアイデアもあったが、それではまた、きれいだから火をつけづらいということになる。作り手の火をつけてほしいという願いは、受け手の火をつけたくなるという気持ちとイコールにならねばならない。ここから、火をつけて完成するグラフィックに至った。それも、コミカルなもののほうが楽しいだろうと。

実際に製作してみると、燃え尽きるまでろうそくの外壁が維持され、溶けたろうが流れ出さないよう成形するのが難しかったり、火をつけるポイントにうまく絵柄を合わせるのに苦労した。素材や絵の貼り付け方に試行錯誤の連続で、イメージをプロダクトへ落としこむのに最も腐心したそうだ。

「coin」と名付けられたプロダクト。火をつけてみたくなるデザインになっている

手作業で作り出される和ろうそく

大西 巧
滋賀県／和ろうそく職人

滋賀県高島市生まれ。立命館大学卒業後、京都の線香メーカーを経て、家業である有限会社大興に入社。実父である3代目大西明弘に師事し、伝統技術である手掛け製法を学ぶ。2011年「お米のろうそく」でグッドデザイン賞・グッドデザイン中小企業庁長官賞（特別賞）を受賞。2015年伝統的工芸品産業大賞若手奨励部門 奨励賞受賞。

手のひらに収まるサイズ。火との組み合わせがおもしろいアイデア

自然に抱かれる滋賀から発信

滋賀県には山と湖があり、自然の循環の中に人がいることを意識しやすい土地である。そこで作る和ろうそくは、人が自然から離れがちな現代において、自然との距離をもっと身近に感じられるのではないか。自然と仲良く暮らす滋賀県からさまざまなものを発信してゆく、その積み重ねの一つとして存在できればと、大西さんはいう。

今後もより多くの人が和ろうそくに親しむ機会を増やすため、プロジェクト当初に発案した、コンパクトな燭台と組み合わせて旅先であかりを楽しめるセットにも挑戦したい。それは本プロジェクトで新しいことに取り組んだ中で生まれたアイデアなので、ぜひやってみたいとのこと。「いろいろな発想を一つ一つ丁寧に形にし、人が火をつけてみようという気になるものづくりを続けていきたい。電灯を消してろうそくに火を灯したときの、空気が澄んでいくような感覚をみなさんと共有できれば、和ろうそくを次代へ繋げていけると確信しています」と、大西さんは語った。

山と湖が身近に感じられる環境で匠の作品が生まれる

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT